

東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター

## 多言語・多文化 教育研究

Multilingual Multicultural Education and Research

URL <http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/>

特集

多言語・多文化教育研究の  
新たな展開を目指して

センター発行の刊行物・教材を手にとる参加者 - 第4回 全国フォーラム

2006年4月に本学に設立された多言語・多文化教育研究センターは5年間にわたって、文部科学省特別教育研究経費による「多言語・多文化教育研究プロジェクト」を実施し、日本の多言語・多文化化に伴う課題解決にかかわるさまざまな活動を展開してきました。教育活動に

No.18 2011 (平成23)年3月

## CONTENTS

- P.2…【特集】 座談会 多言語・多文化教育研究プロジェクトの5年間を振り返って
- P.6…【研究】 連載 12 世界の多言語・多文化
- P.7…【教育】 原点をみつめて―「渴望」と「充足」のバランス―
- P.8…【研究】 多言語・多文化社会研究 全国フォーラム開催  
多言語・多文化協働実践研究 1～14 / 別冊 1～3

においては、日本の多言語・多文化の現状を学ぶAdd-on Programの実施と多文化コミュニティ教育支援室を通じた学生ボランティア活動のサポートを、研究活動においては、自治体および実践者と研究者による協働実践研究や世界諸地域の比較研究をおこなう世界の多言語・多文化社会研究を、そして社会連携活動においては、外国につながる子どもたちのための教材作成と多文化社会専門人材養成など、その活動の規模と範囲は、他に類をみないものでした。

本学としてはもちろん、国立大学としても初の試みとなったこのプロジェクトは、軌道にのるまでにはさまざまな試行錯誤がありました。全国から寄せられた反響は、こうした活動にたいする切実なニーズを顕在化させただけでなく、各地に散らばる実践者と研究者をつなぎ、ネットワークを形成してきたという点で、本学ならではの社会貢献のあり方をも示すことのできたものであったと言えます。本号では、プロジェクトを牽引してきたコアメンバーによる座談を通じて、この5年間の成果を振り返るとともに、今後の課題を探ります。なお、多言語・多文化教育研究センターは、2011年4月より「多文化社会人材養成プロジェクト」を実施いたします。今後とも本センターの活動にご期待ください。

## 座談会

## 多言語・多文化教育研究プロジェクトの5年間を振り返って

尹 2006年度より始まった多言語・多文化教育研究プロジェクトも、いよいよ終了となります。今日は、本センターのこれまでの活動の意義について、「学生」、「大学」、「社会」といったキーワードを手がかりに、それぞれのお立場、経験からお話いただけますでしょうか。

## 大学と社会との関わり

青山 私は、多文化コミュニティ教育支援室の立ち上げにかかわり、また、Add-on Program「入門」の授業を担当してきました。支援室の活動では、とにかく学生たちの力に気づかされましたね。エネルギーやバイタリティ、創意工夫が素晴らしい。また、多言語・多文化社会の課題について考える授業では、学生の反応がよく、講師との間でキャッチボールが行われていますし、教師としても力量を問われます。また、「社会」という点では、現場の実践者の皆さんからの反応が大変に大きかった。例年300人を超える参加者のある「全国フォーラム」は歴史に残るものであるし、それぞれの現場で日々試行錯誤しながら奮闘されている実践者の方たちをつなぐことができたのは大きな成果。一方「大学」という観点で言うと、本センターは大学にとっても不可欠な教育研究組織であるにもかかわらず、学内での認知度は十分とはいえなかった。組織としてどう根づかせていくのかは今後のさらなる課題です。

伊東 たしかに「多言語・多文化」という視点を東京外国語大学としてもっと打ち立てる必要がありますね。本センターのニーズは社会的には非常に高い。大学としても、足元の日本の国際化にどう目を向けていくのかが

日時 2010年12月22日 14:50-16:20  
場所 多言語・多文化教育研究センター会議室  
参加者 北脇保之（センター長）  
青山亨（副センター長）  
伊藤祐郎（副センター長）  
杉澤経子（プログラムコーディネーター）  
尹慧瑛（センター長補佐）

重要だと思います。ところで、本センターの活動は、多文化コミュニティ教育支援室という、学生の学びの場の提供から始まったわけですが、これは同時に私たち教員の学びの場でもあった。学生による活動自体が社会との関わりを持っているし、そこには専攻語の活用という本学ならではの特色もある。これはぜひ続けていくべきです。また、大学が象牙の塔にならないためにも、教員も積極的に社会とつながりを持つ構造が必要ではないかと思えます。この点は理系の大学と違って文系の大学の限界があるかもしれないですね。

杉澤 学生について言うと、支援室の活動と Add-on Program との連携が有機的に動いていた。視点があっての実感をともなった学びというか。なかには学生自身の生き方に大きく影響を与えて、その後弁護士となり、今回コミュニティ通訳コース（2010年度「多言語・多文化社会専門人材養成講座」）を受講した人もいます。学生たちが本学で外国語を学ぶ意義や、日本国内における多言語・多文化に関わる人材育成のニーズなどに、実践を通じて気づいていったのではないかと感じます。研究も社会連携も教育の基礎があってこそその連続だった。最初は教員に語学ボランティアとして現場を知ってもらい、その上で、授業のプログラムを作っていたことなど。本センターだからこそできたプロジェクトだと思っています。

北脇 外大ということで言うと、私が担当する Add-on Program「政策と法」という授業は、250人を超える受講者がいる。学生は自分が言語を学んでいることが何につながっているのかを知りたがっていると感じますね。大学院生の研究活動を支援する「ミニ研究プロジェクト」では、日本の多言語・多文化に関心を持つ研究者の卵が外大にもいるんだということもわかった。大学は社会に根を下ろしたものでなくてはならない、だとするとセンターがやってきたことの重要性が見えてくると思えます。



Add-on Program 言語技能入門の教室

また、外国につながる子どもたちを対象とした教材開発についても、本学が教育の専門大学ではないというところで苦労はあったが、結果として良い教材ができ、ダウンロード数も現在62万を超えた(2010年11月末現在)。何らかの強みを持ったところがネットワークを作って、結果を出すことが大事だと感じる。とはいえ、こうした期限付きのプロジェクトに関わる教員の多くは、本来の専門における教育研究の任務があるなかで、無理があるのも事実。それが大学になかなか根を下ろさないことにつながる。

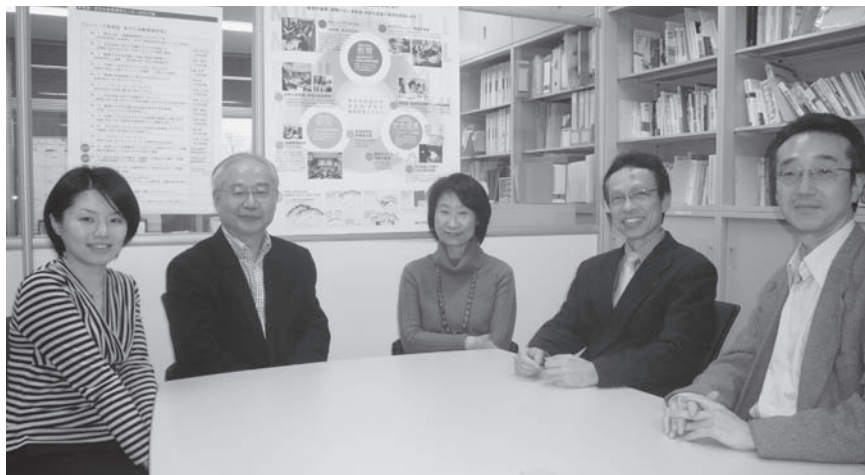
## センターの教育活動

**尹** 逆に、プロジェクトの専任教員に期待される仕事は、大学本来の教育研究とは異なって、企画・運営やコーディネートといったことが中心になりますよね。それでも、授業やボランティア活動のサポートなどのセンターの教育活動を通して、一人の学生にいろんな側面から関わる機会があって、彼・彼女たちの成長や迷いを目の当たりにすると、自分が「教育」というものに関わってるんだなということを実感します。

**青山** 多言語・多文化の授業に対する学生の関心は本当に高いです。

**尹** 最近、入門や概論の授業を経て、もっと深く勉強をしたいという学生からの相談が増えてきて。センターでは「多言語・多文化」と言っているけれど、テーマとしてはとても広いので、その先を考えさせるための取り組みが必要だと思っています。もう一つ気になっているのは、多文化コミュニティ教育支援室でおこなっている活動についての学生たちのとらえ方です。みんなとても一生懸命やっているんだけど、「ボランティアをやっている」という言い方をします。例えば就職活動中の面接の場面などでです。でも、実際は複数人間でプロジェクトをつくりあげていたり、コミュニケーション能力を磨いたりだとか、要するに人との関わり方のスキルを学んでいるとも言える。大学もこうした活動を「ボランティア」という言葉でくくってしまうべきではないと思う。

**北脇** 就職活動で、支援室での活動をアピールしにくい、という学生の話があった。そこを大学がバックアップする必要がある。ボランティア活動=支援活動、ではなくて、多様性を持った人達と一緒に何かをすすめていく経験をつんでいる、これを企業的に言えばダイバーシ



座談会に参加の多言語・多文化教育センター運営委員(左から尹、北脇、杉澤、伊東、青山)

ティマネージメントとつながる、ということをアピールすることもできる。学生が学内でどういう力をつけて出て行くのかを考えるのは大学の任務。多言語・多文化の授業や支援室の活動を経て自分なりの進路を見つけている学生が出てきているので、センターも寄与していると言えるのではないかな。

**尹** センター活動の意義、成果についての話が続きところで、反省点や課題についてはいかがでしょうか。

## 国立大学に求められる変革

**杉澤** 学内の教員に関わっていただく道筋がなかなかつくれなかったということでしょうか。

**青山** やはりセンターという組織が行うプロジェクトであったという、仕組みの問題がありました。

**北脇** 研究分野によってはもう少し学内教員を巻き込むことができたのではないかな。例えば「日本近代史」というテーマで研究会をやっていくなど。あるいは、今年の全国フォーラムで議論した「多文化共生を問い直す」といったテーマであれば、専門として議論できる先生はたくさんいる。センターでは、地域や自治体・NPOに関わる人を「実践者」と言ってきたが、運動や主張として「実践」をしてきた方たちもいる。

**青山** 将来的な展望も含めて課題だと思うのは、海外における類似の研究機関との連携がはかれなかったこと。ウェブサイトも多言語化すれば海外とのつながりももっとできたかもしれない。現状ではキャパシティを超えた課題ではあるが。

**北脇** 例えば、移民研究が一般的な地域における研究機関と、このセンターとの交流があると良い。本センターも、海外からの問い合わせを見る限り、外から見たらそういう機関だと思われている。

**尹** 仕組みということ言えば、そのための予算と人材

があったことで、活動の多くをセンター内で完結させていた。学内にはいろんな分野を得意とする部署があるので、今後大学本体がプロジェクトに取り組むならば、そういうところとの連携も考えてはどうかと思う。例えば今回で3号目となった研究誌は、これまでになかった「実践研究」をとりあげるジャーナルとして年々評価が高まっているし、次号への投稿希望者も多い。長い目で見て定着させるためには、学内のいろいろな部署との連携が必要だと思う。

**北脇** 本来はセンターのスタッフは最小限にして、授業関係の事務や、研究成果物の発行などは、本来その機能を持った学内の部署が担うということもあり得る。

**尹** プロジェクトを通じて難しいなと思ったのは、大学が社会とつながるときには、教員の仕事も、事務の仕事も、通常とは異なる対応や発想が求められるということ。それをどこまで背負えるか、ということが出てきていると思う。大学の教員がどこまで社会サービスに携われるのか、また、「組織」という枠で動くことができるのか。オーバーワークであることは事実。

**北脇** 物事の意味決定がどういう場でどういうルールにもとづいて行われるかが、ますます問われてくる。国立大学が岐路にたたさされている今、思い切った変革が必要なことは確か。

**青山** 企業はそこを考えているし、がんばらないとつぶれる。大学も生き残りをかけて改変していかなければならないのに、なかなか仕組みを変えるのは難しい。

**尹** そうしたなかで、センター活動に関わる教員やスタッフには、ある種共通のモチベーションや志があったと思う。それがなくてはやれなかったはず。

**杉澤** センターは、事務職員とマインドを共有して事業にあたってきた。ここの活動は教員だけでは動かない。スタッフの力が大きかったということは評価してもらい

たい。ところで、伊東さんと青山さんは、立ち上げのときからずっと関わられていたけれど、それを支えていたものって何だったんですか？

## プロジェクトの原動力

**青山** 私の場合、自分自身の「多文化」体験が大いに関係していると思います。小学生の時、親の仕事の都合でカナダの小学校に放り込まれた。楽しかったが、その後日本に戻ってから学校の授業がわからずに苦勞したこともあります。大学時代にはオーストラリアに留学し、現在の妻と出会った。妻はラオスからの難民で、オーストラリア国籍。妻とは英語、子どもとは日本語で会話しているが、家庭内でも言語や文化の「壁」があって驚くことは多々ある。日本に住む外国人の配偶者として、いろいろな手続きも経験した。また、専門としては多民族国家インドネシアを研究している。こうしたことから、教員として、学生への教育を通じてこれからの日本社会の意識を変えていく必要があると思っている。

**尹** 濃淡はあるとしても、外大の教員は、どなたも多言語・多文化ということに関わっているわけで、その部分で何ができるかを出し合ってもらい、つなげて、大学全体として見える形で続いていけばよいのでは。いろいろな先生と個人的に話をしているとそう思う。

**杉澤** そういう思いを持っている先生たちは多いでしょうね。やはり仕事の負担があるとなると尻ごみしてしまうかもしれないけれど、「部分」として関わるといいう仕組みを作りたいところですね。

**北脇** 志を共有するということは大事だけれど、それが内向きにならないということも大事でしょうね。

**伊東** 私の場合は、平成8年からの文科省の併任で、年少者の日本語教育に関わるなかで、留学生の日本語教育との違いに気づかされて、それまでの経験が打ち砕かれた。すべて学びなおす必要があったわけです。その経験があったからこそ、外大生が日本語・学習支援の活動をやるという時に協力を持ちかけられて、何の抵抗もなく受け入れられた。学外でやってきたことの経験を、外大で活かせるなら本望だという思いでした。

**杉澤** 教員のマインドってやっぱり学生に対する愛情なんですね。

**伊東** 外大でやることの面白さというのは、日本語専攻の学生だけではなく、スペイン語、ポルトガル語といった、外国につながる子どもたちの母語を学んでいる学生が関わる点。そこで日本語の難しさを発見して日本語を見直して欲しいと思った。日本語教育の専門性にとらわれていないほうが入りやすい。そうして、子どもの日本語教育から、地域の日本語教育にかかわる過程で、杉澤



語学ボランティア研修会（東京外大本郷サテライト）

さんに出会ってしまった(笑)。そして今日に至るという。  
**尹** 大変なお仕事だったと思いますが、それでもやはり興味とか関心、希望とか使命感のようなものがあつたからこそ、続いてきたということではないでしょうか。  
**伊東** やっぱり刺激とかわくわくする気分がありましたよね。  
**青山** そして、一緒にプロジェクトをすすめていくメンバーには本当に恵まれていました。

**尹** この5年のプロジェクトでは、ひとつの活動のあり方というものを構想して実践してきたわけですが、枠自体をもっと鍛えていくべきではないか。例えば、センターが用いてきた「多言語・多文化」という言葉。これをこの先じっくりと考えていく過程で新しい人たちを引き込むなど。もう一度言葉や理念に戻るといことが、次のステージに必要なのではと思います。今日はありがとうございました。

## 東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター

Center for Multilingual Multicultural Education and Research

多言語・多文化化が急速に進む日本社会の課題に「教育」「研究」「社会連携」の3つの分野で取り組みます。  
 ……\*……  
 東京外国語大学内外の研究者と現場の実践者の協働による研究で、問題解決に寄与します。  
 ……\*……  
 差別や偏見、排除のない多言語・多文化社会の実現を目指します。

**Add-on Program**  
(アドオンプログラム)  
「多言語・多文化社会」

多言語・多文化社会に関する理論と実践的な知識を幅広く獲得できる授業科目群(全10科目20単位)。多彩な専門分野の専任教員と経験豊かなゲスト講師による授業を、学生・市民聴講生に開講。



**多文化コミュニティ教育支援室**

「日本語・学習支援」、「国際理解教育授業づくり」に関わる学生のボランティア活動をサポート、知識やスキルを学ぶ研修会も開催。



**Education 教育**

総合的な学び  
—知識と経験の連環—

多言語・多文化社会が抱える課題に取り組みることができる人材の育成を目指します。

**世界の多言語・多文化社会研究**

本学専任教員、センターフェロー、学外からの参加者らが、所属機関や研究地域・領域を超えて多言語・多文化社会をとらえる、新たな方法的視覚の構築を目指す共同研究。



**東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター**

**多言語・多文化社会専門人材養成講座**

東京外国語大学オープンアカデミーで、「多文化社会コーディネーターコース」「コミュニティ通訳コース」2コースを開講。



**Research 研究**

—大学と現場の融合—

多言語・多文化の観点から世界や日本の諸問題に取り組む研究活動です。

**協働実践研究プログラム**

経済界、地方自治体、教育界、NGO/NPO、国際交流団体、弁護士やカウンセラーなどの実践者と研究者が協働で行い、多言語・多文化社会化が進む現代の日本で生じる問題解決に寄与する実践的研究。



**新進研究者・実践者支援**

新進研究者や実践者をセンターフェローとして支援する制度。

**Social Partnership 社会連携**

—ネットワークの構築—

センターの目指す多言語・多文化社会の実現のため、関係者と連携して社会に貢献します。

**語学ボランティア活動の推進**

外国人相談の通訳および自治体等の文書翻訳業務に協力。

**在日外国人児童のための教材開発**

ポルトガル語、フィリピン(タガログ)語、スペイン語などの外国語やイラストを多用した学習教材(漢字・算数)を開発、実践者と連携して普及。



**刊行物**

多言語・多文化社会の実践研究に特化した充実した内容

- シリーズ多言語・多文化協働実践研究 (別冊1~3)
- シリーズ多言語・多文化協働実践研究 (1~11, 12~14 (続刊))
- 多言語・多文化実践と研究 (Vol.1~2, 3 (続刊))
- 多言語・多文化ブックレット(1~6)
- ニュースレター「多言語・多文化教育研究」(季刊)
- メールマガジン(隔週刊)
- 多言語・多文化教育研究センター年次報告書(年刊)



国立大学法人 東京外国語大学

3つの柱で活動してきた多言語・多文化教育研究センター

## 連載 12 (最終回) 世界の多言語・多文化

### 沖縄戦、英語、分かれ目

亀山 郁夫 (東京外国語大学長)

生まれて初めて訪れる沖縄——。私は、いま、一つのおぼろげな記憶を確実のものにしようと、PCの検索エンジンに、「沖縄戦」、「英語」、「運命」と入力してみる。期待する結果は出てこない。そこで「運命」に代えて、「分かれ目」と入力してみた。すると、出てきた。

琉球大学 21 世紀フォーラムでの講演を終えた翌日、私は、同大に勤務する大浜さんの案内で沖縄観光に出た。めざすは、沖縄北部の本部町にある海洋博公園。道々、大浜さんの口から「追いつめられる」という言葉がなんだか繰り返されるのを耳にした。沖縄戦末期、米軍に追われて南下していった人々の話である。私は、そうした人々の群れを掻きわけて北上していくような奇妙な錯覚に浸っていた。

前日の豪雨とは打ってかわり、昼過ぎから雲一つない好天になった。私は溢れる感謝の思いとともに、沖縄の冬の穏やかな日差しに酔った。海洋博公園の沖あいに広がるマリンプール、厚さ 60 センチのアクリルガラスをえらで撫でるようにして目の前を横切っていく巨大なジンベイサメ、自殺の名所として知られる万座毛の猛々しい断崖、沖縄サミットの主会場となった万国津梁館の超豪華なホール、ブセナ・テラスから見下ろしたプライベートビーチの白い輝き。期待を裏切るものは何一つなかった。

午後 3 時過ぎ、私たちは車から降り、嘉手納基地沿いの道の駅の展望台から、長さ四千メートル近くあるという二本の滑走路を眺めおろした。次に、普天間基地南側にある嘉数高台公園を訪れ、そこに据えられた裏さびれた展望台から、問題となっている基地の全貌を限りなく水平に近い角度から見下ろした。そしてここまでは、ある程度まで予期できた沖縄の姿だった。だが、展望台の階段を降りた私の眼に「トーチカ」というカタカナ文字が入り、脳裏で何かがパチンと弾けるのを感じた。「トーチカ」はロシア語で「点」を意味し、「コンクリート製の防御陣地」に転用された軍事用語である。いつ、どのような経緯でこのロシア語が沖縄にまで入りこんできたのか、私の想像力は及

ばない。それはともかく、兵士たちは、コンクリート塊に穿たれた銃眼をとおして、北方から攻めくだってくる米兵を迎え撃ったのだ。その銃撃戦の光景を想像しはじめた私は、何かしら避けては通れない関門のように「ひめゆりの塔」を意識しだした。私ももっと南に下らなくてはならない……

翌日曜日の昼少し前、私は、タクシーを借り切って「ひめゆりの塔」をめざした。すべてを悟りきったように穏やかな表情をした運転手は、聞くと、私と同じ年齢であることがわかった。

「これでも戦後の生まれなんですよ」  
申しわけなさそうな答え方が印象的だった。「ひめゆりの塔」に向かう道すがら、彼は、方言のまじる重い調子で、沖縄本土に点在する戦跡をめぐる悲しいエピソードをいくつも話してくれた。その多くは、「ガマ」と呼ばれた鍾乳洞で悲しい運命をたどった人々の物語だったが、はっきり聞き取ることは困難だった。

「沖縄戦」末期、正確には、1945 年 4 月 1 日、嘉手納から約 10 キロ北に位置する読谷村という村で悲劇は起きた。村に二つあったガマの一つでは、降伏を求める米兵に応じず、村人 83 名が集団自決をとげた。そのほとんどが女たちや子どもたちだった。ところが、そこから一キロ隔てた別のガマでは、身をひそめていた約千人の村人たちが無事生きながらえた。

同じ村の二つのガマの間で、なぜ、これほどにも残酷な「分かれ目」が生じたのか。運転手の話だと、そのカギとなったのが「英語」だった。軍国主義を叩きこまれた第一のガマのリーダーは、「生きて捕囚の辱め



「ひめゆりの塔」の前で

を受けず」との戦陣訓に従い、女子どもたちに死の選択を迫った。他方、もう一つのガマには、ハワイから帰った移民が二人いて、「殺しはしないから出て来なさい」との米兵の勧めにしたがい、最終的に千名の村人を死から救った。

「恐ろしい話ですね」

私の心は、83人の村人たちの恐怖に同期していた。

しかし思うに、この悲劇は、英語を解するか、解さないかに問題の核心があったわけではない。ハワイに生活した経験のある二人の移民は、英語による命令以外に、その響きの奥にこもる微妙な何かをしっかりと聴き分けていたのだと思う。それこそは異文化そのものの理解であり、「分かれ目」となったカギは、その理解を土台にした人間そのものに対する信頼の念だった

はずだ。

那覇市内から約1時間、名城バイパス沿いに南に下ってきた車は、やがて右折してドライブインの駐車場に入った。車から降りた私は、その一瞬、道路の向かいへと流れていく人々の群れに気づき、「ひめゆりの塔」に着いたと直感した。

慰霊碑は、平和記念資料館の入口から思いがけない近さにあった。私は、その前に大きく口をあけているガマの存在に気づき、左手に回って身を乗り出すようにしてその底をのぞき込もうとした。だが、午後の陽ざしで瞳孔が開いていたせいも、ほんやりと黒い闇のほか何ひとつ見分けがつかなかった。そしてその一瞬、私は、自分が沖縄について抱えてきたすべてのオーラが弾けとび、沖縄が、かすかながらも確実に私自身の現実の一部になったと感じたのだった。

## 《教育》

### 原点をみつめて — 「渴望」と「充足」のバランス —

総合国際学研究院准教授 武田 千香

大学で学んでいることを活かして、国内に在住する外国の人たちの力になりたいと、ポルトガル語専攻の学生が中心となって、学生ボランティア・グループ「東京外大在日外国人交流ネットワーク～Amigos」を立ち上げたのは2003年4月のことであった。学生たちにまずできることは、ブラジル人の児童生徒への学習支援だった。ポルトガル語専攻の学生が中心ということから、対象はおのずからブラジル出身の人々に限られたが、そのグループの名称に「東京外大」がつけられた背景には、ほかの言語を専攻する学生にもこの活動に参加してもらい、対象もほかの地域から来た人たちに広げたいという学生たちの思いがあった。学生の活動に対する感謝の声など社会からの反響も大きかったが、それ以上に目を見張ったのが、その活動を通してみるみるうちに成長していく学生たちの姿だった。彼らは瞬く間に「コミュニケーション力」、「行動力」、「組織力」、「責任感」を身につけ、人間的にも知的にも大きく生まれ変わっていった。これはぜひできるだけ早く全学に広げたい、そういう思いから平成16年度文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)に「在日外国人児童生徒への学習支援活動」として応募し、2004年9月に採択された。その約1か月後の10月21

日に設置されたのが「多文化コミュニティ教育支援室」である。言うまでもなく、これが現在の「多言語・多文化教育研究センター」の興りである。原動力は「学生たちのボランティア精神」だったのである。

そんな彼らの意志を何としても汲みあげなくては、と私を「その気にさせる」きっかけとなったあるエピソードがある。あるとき数人の学生が私のところへやってきて、在日ブラジル人の状況と課題を知るために講演会を催したいが、だれか紹介してもらえないかと言ってきた。聞けば、自分たちに何ができるかを勉強しようと、そのための資金として外語祭の料理店の収益の一部を貯めてあるのだという。そこで開催されたのが、サンパウロ大学教授二宮正人氏による講演会「DEKASSEGUI と日本～私たちにできること」(東外ネット主催)であった。それは今も同支援室のHPの設立までの歩みに掲載されている。つまり今ある本学の多言語・多文化教育研究事業は、学生の「ポケットマネー」によって開始されたわけである(もちろん二宮氏がその講演料をいったん受け取り、そのうえでアミーゴスに寄付されたことは言うまでもない)。

(次ページに続く)

とにかくアミーゴスの発足当時の彼らのエネルギーと意志たるや凄まじかった。それは彼らの進路が証明している。ある者は集住都市の中学校の教員になった。またある者は旅行代理店への就職が決まっていたが、ぎりぎりまで迷った挙句、やはり自分は小学校教員として外国につながる子どもたちの教育に携わりたいと、内定先を「蹴って」小学校教員免許の取得のため大学院進学に切り替えた（そして実際にその職業に就いている）。また当時はまだポルトガル語を理解する弁護士がいなかったことから、自分が第一号になるとロースクールへの進学をし、見事に司法試験に一発合格を果たし、現在は東京大学で助教論文を書いている者もいる。そしてある卒業生は、何が何でも在日外国人の力になりたいとこだわり続け、県警に転職を果たした。

今、思うと、彼らのこの絶大なエネルギーは、言ってみれば「渴望状態」から生まれたのかもしれない。当時まだ同センターの活動が何もなかった時代、彼らはある意味で「飢えていた」。だから、自分の求めるものが意識化され、それをがむしゃらに情熱的に追い求めた。その結果、自らの人生を強い意志のもとに切り拓いた。もし「渴望」が彼らの「意志」を育て、自発的に生きる力を獲得させたとすれば、「教育」とは与えすぎていけない、とつくづく思う。だが、もちろんその「意志」の発露をうまく掬いあげ、バックアップし、リードする体制の整備は必要だ。だからこそ彼らは思い描いた進路をとることに成功したのだろう。となると「教育」には常に「渴望」と「充足」の絶妙なバランスが求められるということだろうか。

## 全国の実践者と研究者をつなぐ

### － 多言語・多文化社会研究全国フォーラム開催 －

本センターでは、2010年11月27～28日に、全国フォーラムを開催しました。第4回となった今回は、これまでのセンター活動の総括から始まり、協働実践研究と世界の多言語・多文化社会研究の成果をともに示すとともに、「差別や排除のない公正な社会をめざして」というセンター活動の理念にもとづいて、「多文化共生」を問い直すパネルディスカッションを設け、387名の参加がありました。過去最多の応募があった発表セッションでは各会場で活発な議論が交わされ、全国の実践者と研究者をつなぐ貴重な機会としての全国フォーラムの役割が改めて認識された二日間となりました。



#### 刊行物

#### シリーズ多言語・多文化協働実践研究 1～14 / 別冊 1～3

- |  |   |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>① 時はいま、「協働実践研究」はじめの一步<br/>――非収奪型研究と社会参加――</li> <li>② 共生社会に向けた協働のモデルを目指して<br/>――長野県上田市 在住外国人支援から見てきた課題と展望――</li> <li>③ 越境する市民活動？外国人相談の現場から？<br/>行政区を超えた連携――東京都町田市・神奈川県相模原市――</li> <li>④ 外国につながる子どもたちをどう支えるのか<br/>当事者も参加した拠点・ネットワークの構築――川崎市での実践――</li> <li>⑤ 地域日本語教育から考える共生のまちづくり<br/>――言語を媒介にともに学ぶプログラムとは――</li> <li>⑥ コーディネーターって、なんだ!？<br/>多文化社会での役割・専門性・育成プログラム</li> <li>⑦ 共生社会に向けた協働のモデルづくり<br/>――長野県上田市、企業・日系ブラジル人家族の調査から見てきた<br/>第二世代育成の視点――</li> <li>⑧ 越境する市民活動と自治体の多文化共生政策<br/>――外国につながる子どもの支援活動から――</li> <li>⑨ 外国につながる子どもたちの教育を地域から育む試み<br/>――地域、学校、行政、当事者の協働実践モデルの構築を目指して――</li> <li>⑩ 共生のまちづくりに向けた地域日本語教育プログラム<br/>――長野県上田市と東京都足立区の実践から――</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>⑪ これがコーディネーターだ！<br/>――多文化社会におけるコーディネーターの専門性と形成の視点――</li> <li>◆新刊 ⑫ 地域における越境的な「つながり」の創出に向けて<br/>――横浜市鶴見区にみる多文化共生の現状と課題――</li> <li>◆新刊 ⑬ 共生社会に向けた協働の地域づくり<br/>――「協働型居場所づくり尺度」の開発<br/>～長野県上田市における実践と研究</li> <li>◆新刊 ⑭ 多文化社会コーディネーターの専門性をどう形成するか</li> <li>別冊 1 多文化社会に求められる人材とは？<br/>「多文化社会コーディネーター養成プログラム」<br/>～その専門性と力量形成の取り組み～</li> <li>別冊 2 外国人相談事業――実践のノウハウとその担い手――<br/>～連携・協働・ネットワークづくり～</li> <li>別冊 3 多文化社会コーディネーター<br/>専門性と社会的役割<br/>――「多文化社会コーディネーター養成プログラム」の取り組みから――</li> </ul> |
|--|---|

発行 東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター  
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 研究講義棟319号室

Tel 042-330-5441 Fax 042-330-5448  
E-mail [tc@tufs.ac.jp](mailto:tc@tufs.ac.jp)  
URL <http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer>